

## 「神のあかし」

ヨハネの手紙第一

5:1～21

### 1. 油注がれた者

【新改訳改訂第3版】

I ヨハネ

5:1 イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。

「イエスがキリストであると信じる者」、それはイエシュアが父なる神から遣わされた神の御子であるということ、またイエシュアはキリストすなわちメシアであるということです。メシアとは「油注がれた者」という意味であり、イスラエルの指導者である王、預言者、祭司としての働きを融合した存在です。またメシアは「ダビデの子」とも呼ばれ、イスラエルを再び建て直し、そこに王座を設け、地上の全ての国々、民族を永遠に治められる王であるという意味もあります。ちなみにメシアの語源である「油を注ぐ」という意味の動詞マーシャハ(משח)は本来、ヤコブ（後のイスラエル）が生まれた地に帰るということを示しています。

【新改訳改訂第3版】

創世記 31:13 わたしはベテルの神。あなたはそこで、石の柱に油をそそぎ、わたしに誓願を立てたのだ。さあ、立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。

この御言葉から「油注がれた者」メシアとは、イスラエルの民、ユダヤ人たちを再び「生まれた国」に帰らせること、すなわち彼らの父祖であるアブラハムに神が与えると約束されたカナン之地、またダビデがそこに王国を建て上げたイスラエルの地に集めることが指し示されていると考えられます。イエシュアがメシアとして再びこの地に来られる時、それが成就すると考えられます。このように、イエシュアがメシアであるとは、単なる名前や存在を表しているのではなく、神の御子イエシュアを通して、父なる神、御父、すなわちイスラエルの神である主がなそうとしておられるご計画が指し示されたものであり、聖書全体に記された全ての預言が成就することが指し示されていると考えられます。これら神の約束、ご計画の実現を受け入れ、信じて待ち望む者が「イエスがキリストであると信じる者」であり、また「神によって生まれた者」のことであると考えられます。そして「神によって生まれた者」は「生んでくださった方」すなわち神を愛し、また同様に生まれた者をも愛することが述べられています。

### 2. 重荷とならない

5:2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。

5:3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。

以前取り扱った同じヨハネの手紙第一の 3:23 でこのように述べられていました。

【新改訳改訂第 3 版】

I ヨハネの手紙

3:23 神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。

このように「神を愛するとは、神の命令を守ること」であり、また「神の命令とは、御子イエス・キリストの御名を信じ、互いに愛し合うこと」であると言えます。そして「その命令は重荷となりません。」と筆者ヨハネは述べています。一見信じること、また愛し合うことは努力や忍耐など、ある種の労苦が伴うと考えてしまいます。しかしヨハネはそれを「重荷となりません」と言っています。なぜなら「神の命令」である「御子イエス・キリストの御名を信じる」こととは、先ほど述べた「イエスはキリストであると信じる」ことと同じ意味であり、神がご計画され、約束され、そして御子イエシュアによって成し遂げられるものであり、言わば神が、そしてイエシュアが負っておられる責任「重荷」であり、神を信じる者にとってそれは「重荷」ではなくむしろ良い知らせ「福音」であるからです。また「神の命令」である「キリストが命じられたとおりに…互いに愛し合うこと」とは、ヨハネの福音書 13 章に記された、イエシュアが弟子たちに与えられた「新しい戒め」のことであると考えられます。

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネの福音書

13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたと一しょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

この御言葉は、イエシュアが十字架にかかれる前夜、ご自分が弟子たちから離れて行かれること、「しかし後にはついて来ます。」という約束についてのものです。またその約束とは続く 14 章に記された

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネの福音書

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

という内容を指し示しています。これはイエシュアがこの地上に再び戻って来られる「地上再臨」と、その前に起こる「空中携拳、空中再臨」をも指し示した神のご計画の最終段階とその完成が述べられていると考えられます。このような文脈の中で語られた「互いに愛し合いなさい」という戒めが、単に仲良く平和に暮らなさいという意味でないことは明らかです。イエシュアはご自分が再び来られることを信じて待ち望むことを覚えさせるためにこの戒め、命令を与えられたと考えられます。花婿が花嫁を迎えに来るように、イエシュアが私たちを迎えるために来られること、そしてイエシュアがいる所「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせる」こと、これもまた私たちにとって「重荷」ではなく良い知らせ「福音」であると言えます。ですからヨハネは「その命令は重荷とはなりません。」と述べたのだと考えられます。

### 3. 世に勝つ

5:4 なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。

5:5 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。

「世に勝つ」、と聞くとやはり争いや戦いをイメージしてしまいがちですが、ここで「勝つ」と訳されているヘブル語はナーツァハ(נצח)と言い、本来は歌や楽器を導く、指揮する「指揮者」の意味で使われている言葉で、正確には楽器を奏でながら合唱を指導するような、ちょうど銘形先生がピアノを弾きながら賛美を導くような様子を表す言葉がこのナーツァハです。ですから「世に勝つ者」とは、世と戦い、攻撃してこれを打ち負かすという意味ではなく、賛美を導く人が礼拝者たちの心と思いを神に向けさせ、その御言葉に耳を傾けさせるように、心を開かせるように導くというような形で世に対して働きかけていくことが私たち「イエスを神の御子と信じる者」の働きであることが述べられ、また勧められていると考えられます。

### 4. 御霊、水、血

5:6 このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。

5:7 あかしするものが三つあります。

5:8 御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。

ヨハネは「御霊と水と血」という表現を用いてイエス・キリストすなわちイエシュアはメシアであることを証しようとしています。一般的に「証しする、証言する」とは、ある出来事や行為などを明らかにするというイメージがありますが、「御霊と水と血」と聞いてすぐにこれがイエシュアの何を表そうとしているのかをはっきりと理解できる人がいるのでしょうか。この「あかしする」ことをヘブル語でワード(ווד)と言い、創世記 43:3 で初めて使われた言葉です。

【新改訳改訂第3版】

創世記 43:3 しかしユダが父に言った。「あの方は私たちをきつく戒めて、『あなたがたの弟といっしょでなければ、私の顔を見てはならない』と告げました。

ここで「戒めて」と訳されているのが聖書で最初のワードです。この箇所はエジプトの宰相となったヤコブの子ヨセフが、兄弟たちに突き付けた条件についてのものですが、ワードが「あなたがたの弟と一緒に」という条件を満たさなければ、「見てはならない」という戒めを指し示していることが解ります。またワードの名詞形「証し」という意味のエードウト(תִּדְוָה)は、モーセの幕屋の時代に作られた契約の箱の別称「あかしの箱」についての記述で初めて使われており、この「あかしの箱」もまた中を「見てはならない」ものであり、モーセの時代にはこの箱そのものさえ限られた者しか「見てはならない」ものでした。このようにヘブル語の視点で見ると「あかしする」とは、限られた人、またはある条件を満たすことによって見ることが許されるが、本来は隠されていることを意味する言葉であると考えられます。この「あかし」についてヨハネは後述の 5:13 で「あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、…よくわからせるためです。」と述べています。つまり「御霊と水と血」はメシアであるイエシュアを指し示しており、そして同時に「永遠のいのち」をも指し示しているということだと考えられますが、では「御霊」、「水」、「血」の三つがそれぞれ指し示すものとは一体何でしょうか。

### (1) 御霊

まず第一に「御霊」についてですが、これをヘブル語でルーアハ(רוּחַ)と言います。これが聖書で最初に使われたのが創世記 1:2 の天地創造の初めの状態が記された箇所です。ここにルーアハの持つ本来の意味があると考えられます。

#### 【新改訳改訂第3版】

#### 創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

「神の霊が水の上を動いていた」と記されている部分に神の「霊」ルーアハが使われています。この文章はその前の「やみが大水の上にあり」という文章と同じ「～が～の上にある」という形式で記されていることが解ります。これは聖書中に頻繁に見られる「並行法」パラレリズムと呼ばれる表現方法で、最初の文章の内容を、別の言葉に言い換え、補足する形で繰り返して述べているものだと考えられます。つまり以下のようになると考えられます。

「やみ」→「神の霊」

「大水（の上に）」→「水（の上に）」

「あり」→「動いていた」

このように考えるならば、「神の霊」すなわち「御霊」とは、「やみ」を言い換えたものであることが解ります。聖書において「やみ」はあまり聞こえの良い言葉ではありませんが、全てを覆い隠す、見えなくする存在のことであり、ここに使われているヘブル語のホシエフ(חֹשֶׁךְ)には「秘密の場所」という意味もあり、明らかにされていない、隠された秘密という意味があると考えられます。ですから「神の霊、御霊」ルーアハとは「隠された神の秘密」のことであると言えます。またこれは前回述べましたが、ルーアハ(רוּחַ)

を構成する三つのヘブル文字、「人の頭」を象り「頭、思考、計画」を意味するレーシュ(ר)、**「釘や鉤」**を象り「定める、決める、提示する」ことを意味するヴァーヴ(ו),そして「柵」を象り「存在（守られる）、命（生かされる）、働き（用いられる）」ことを意味するヘット(ה)から、ルーアハすなわち「**霊**」とは、思考に働きかけ、行動や働きを決定づけるものという意味があると考えられ、ですからそれは「知識と情報」という言葉に言い換えることができると述べました。このように解釈するならば、「**神の霊、御霊**」とは、明らかにされていない、隠された「**神の知識と情報**」のことであり、そしてそれはある目的、計画を成し遂げるための行動、働きを伴ったものであると考えられます。

## (2) 水

しかし隠されたもの、明らかなものではないにしても、この神の秘密は、「大水の上に」そして「水の上に」と記されているように、ここに使われているヘブル語アル・ペネー(אֲרָפֶה)には、「~の上に、前に、表面に」という意味があり、次に取り上げる「水」を包む、導く、覆うような存在であると考えられます。ですから第二に「水」とは、「御霊」すなわち「**神の情報と知識**」である神のご計画の下にあり、その後に従い、神のご計画に覆われた存在であると言えます。神のご計画に従って地に下られ、ただ神にのみ従い、そのご計画のためだけに働かれた御方、これが神の御子イエシュアご自身を指し示していることは言うまでもありません。そしてイエシュアとは「**神の霊**」すなわち明らかにされていない、隠された神の秘密「**神の知識と情報**」を明らかにする御方であり、神のご計画を成就、実現、完成させる御方であるということがこの「水」という言葉に表されていると考えられます。ヨハネの福音書でイエシュアはどのように述べておられます。

【新改訳改訂第3版】

### ヨハネの福音書

3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。

「水と御霊によって」、つまりイエシュアと、そしてイエシュアによって成し遂げられる神のご計画によってのみ、人は神のご計画の完成である神の国に入ることができるということが示されていると考えられます。イエシュアが御父である神に逆らい、その関係を切るならば「人は…神の国に入ることができません。」また神のご計画だけでは、それを実現させる、完成させる存在がいなければ「人は…神の国に入ることができません。」。「水と御霊」すなわち「**神の霊が水の上に**」あることによるのみ神のご計画は果たされ、「**神の国**」は完成し、そこに入るべき人が入ることができるということが示されていると考えられます。このように「水」とは神のご計画を完成させるイエシュアご自身を指し示していると考えられます。

## (3) 血

そして第三に「**血**」についてです。これをヘブル語でダーム(דָּם)と言い、創世記 4:10 で最初に使われているため、そこにこの言葉の持つ本来の意味があると思われる。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

4:9 【主】はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないでしょうか。」

4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。

これは人類史上最初の殺人であるアダムの息子カインとアベルに起こった出来事です。カインはその弟であるアベルを殺してしまいました。そこで神はカインに対し「聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。」と仰せられました。ここにダームが使われています。このように「血」ダームは、「土地からわたし（神）に叫んでいる」存在であることが解ります。地から神に向かって叫び求める存在とは誰でしょう。それは御霊とともに「イエシュアよ。来てください。」と言うイエシュアの花嫁であると考えられます。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの黙示録

22:17 御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

この「花嫁」とは私たち教会のことであると信じ、告白します。また「いのちの『水』がほしい者は…受けなさい。」とあるように、「水」が再臨のイエシュアを指し示しています。そして神に向かってイエシュアを呼び求める者、それは恵みと哀願の「霊」を注がれたイスラエルの民、ユダヤ人であるとも言えます。

【新改訳改訂第3版】

ゼカリヤ書

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

これは終わりの日に、「自分たちが突き刺した者」すなわち神の御子イエシュアを十字架にかけて殺したことを悔いて嘆くようになることを預言しています。まさに流された血について「その土地から、わたしに叫んでいる」ことが示されていると言えます。そしてイエシュアは彼らユダヤ人たちに対してこのように言われました。

【新改訳改訂第3版】

マタイの福音書 23:39 あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。』



「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」とユダヤ人たちがイエシュアを「主の御名によって来られる方」、キリストすなわちメシアとして認めて呼び求める時まで、イエシュアは来られません。つまり彼らがこのように叫び求めるその時、イエシュアは神のご計画の完成である「神の国」を完成させるためにこの地に帰って来られるということです。このように「血」ダームとは神の御子であるイエシュアを呼び求める、叫び求める「御霊」を注がれた人、人々の存在を指し示していると考えられます。筆者ヨハネは「イエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。」と述べています。つまりイエシュアは「水によって」すなわち神のご計画に従うためだけでなく、「血によって」すなわち地からイエシュアを呼び求める者たちの声に応えるために、そしてその者たちを救い、「神の国」に入らせるために来られる御方であるということが示されていると考えられます。

このように「御霊と水と血」とは、隠された神の秘密である神のご計画を明らかにし、それを成就、完成するための存在としてのイエシュアと、そしてそのイエシュアを御霊によって呼び求める人々すなわちイスラエルと教会の存在を指し示しており、「これら三つが一つとなる」ことによってのみ、神のご計画は完成することを表していると考えられます。

## 5. 永遠のいのち

5:9 もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかしされたことが神のあかしだからです。

5:10 神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。

ですから「神のあかし」とは、神がおられる、存在することを証明するものではなく、神が何をなさうとしておられるのかという「神のご計画」がどのようなものであるかを、限られた者にのみ明らかにされるものであると言えます。そしてその限られた者とは「神の御子を信じる者」とは、そのご計画の成就、完成を信じ受け入れて待ち望む者のことであると言えます。

5:11 そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。

5:12 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

5:13 私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

このように、神のご計画の完成を、筆者であるヨハネは「永遠のいのちを持つこと」と表現していると考えられます。なぜなら「神の国」とそこに入るすべてのものは永遠の存在となるからです。神がこのことをご計画されたその目的は、神と人がともに生きる、永遠に生きるためであることがここに述べられていると考えられます。

## 6. 神のみこころ

5:14 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。

5:15 私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになされたことなのです。

このような御言葉を読むと、私たちの願いをかなえてくださる神という捉え方をしてしまいがちですが、かなえられるのは「神のみこころにかなう願い」のみです。つまり「神のみこころ」だけがなるのです。その「神のみこころ」を知り、それを自分の願いとするならば、その願いは必ずかなうのです。これはまさに十字架にかかれる前夜、イエシュアが祈られた祈りそのものです。

【新改訳改訂第3版】

ルカの福音書 22:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

このように、イエシュアはまさに「みこころにかなう願い」をしました。ですからイエシュアによってなされる神のご計画は必ず成就するということを知りましょう。

5:16 だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません。

5:17 不正はみな罪ですが、死に至らない罪があります。

罪には二種類あり、「死に至らない罪」と「死に至る罪」があることが述べられています。それらが具体的にどのようなものであるのかは述べられていません。文脈から考えるならば、重要なのは「神のみこころ」であり、神が「いのちをお与えになる」者とそうでない者とがいるということです。当然のことながら、それを決めるのは私たち人ではなく神です。ですから私たちが「神に求めなさい」と勧められている祈りと願いは、「死に至らない罪」を犯している者、すなわち神が「いのちをお与えになる」者に、それが与えられますようにというものであり、私たちが選んだ人にそれが与えられますようにという類のものではないということです。誤解してはいけません。私たちの祈りと願いが神を動かすものではありません。まず「神のみこころ」というご計画があり、それを果たされるイエシュアがおられ、ただそれだけがなるようにと祈り求めることが、先ほど述べた「御霊と水と血」の中の「血」としての、神に向かって求める存在である私たちの持つべき考え、取るべき姿勢であると考えられます。

## 7. 警戒しなさい

5:18 神によって生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。

「神によって生まれた者」とは、今すでに神を信じ、また神の御子イエシュアを信じている者のことであり、先ほどの「死に至らない罪を犯している」者、神が「いのちをお与えになる」者とは、今はまだ信じてはいませんが、後に「神のみこころ」により、「いのち」を与えられる、すなわち信じるようになる者のことではないかと思われれます。神に「いのち」を与えられた者、すなわちこの「神によって生まれた者」



に対して、もはや罪を犯すことも、また「悪い者」すなわちサタンも、神がその人に与えられた「いのち」を奪うことも消し去ることもできないということが示されていると考えられます。

5:19 私たちは神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています。

5:20 しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

今や「世全体」が反キリスト、サタンの支配下にあります。どんなに優れた知恵や考え方、すばらしいと感じる知識や情報も、そこに神の御子イエシュアが、神のご計画のために来られるキリストすなわちメシアであることが表されていないならば、イエシュアの存在とその働きを指し示すものでないならば、それは神からのものではなく、サタンからのものです。ですから私たちはこれらのものに対して常に警戒する必要があります。

5:21 子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

「偶像を警戒」するとは、前回述べたように、それが神からのものであるか、そうでないかを見分ける、見極めることであると思われます。しかしそこで重要なのは偽物を見破るにはまず本物をよく知る必要があるということです。ですから私たちにとって重要なのは、イエシュアを知り、またイエシュアがなそうとしておられる神のご計画をよく知るということです。私たちの持つべき願いである「主イエシュアよ。来てください。」という祈りは、ただイエシュアの再臨を求めるといっただけのものではなく、今日私たちが受け取ることができるイエシュアについての「知識と情報」を求め、そして受け取ることがを求める祈りであるとも思われます。ですからイエシュアを求めてまいりましょう。イエシュアが何をし、そして何をなさろうとしておられるのかという、神のご計画を求めてまいりましょう。